福祉さとやまべ

発行　松本市社会福祉協議会里山辺支会
編集　福祉さとやまべ編集委員会
印刷　藤原印刷株式会社

四年ぶりの夏まつり

里山辺福祉ひろば推進協議会　会長　篠田　洋一

今年、七月二十八日（金）に令和元年以来四年ぶりの里山辺地区夏まつりが開催されました。新しい里山辺公民館駐車場で行われる、初めての夏まつりともなりました。

夏まつりの趣旨は、福祉ひろば推進協議会関係団体がブースを出して、地域イベントを開催することで、住民参加による地域の賑わいの場を形成し、住民の交流機会を創出するということになっています。簡単に言えば、里山辺の老いも若きも一緒になって夏まつりを楽しもうということであります。

しかし、コロナ禍のためにこの三年間、夏まつりを中止とした経緯もあります。新型コロナの分類が二類から五類へと変更されたものの、依然として感染が収まったとは言えない状況であるので、開催をどうするか悩みました。しかし、地域の皆さんが夏まつりを楽しみにしているだろうこと、新型コロナ感染対策をしっかり取ること、夏場の食中毒対策を徹底することでまつりの開催を決定しました。

さて、夏まつり当日です。会場準備も無事終わり、来場者を待つばかりとなりました。四年ぶりなので、はたしてお客さんは来てくれるのだろうかと心配でしたが、午後六時半の夏まつり開始を迎える頃には公民館駐車場は、人、人、人で埋め尽くされました。クラッカーの合図で夏まつりが始まりました。各ブースの前にはお客さんの長い行列ができ、どのブースも大人気です。夏まつりといえば何といっても、焼きもろこしにかき氷、焼きそばにフランクフルトと大賑わいです。隣のブースに行くにも人混みをかき分けないと前に進めないほどの賑わいです。あっという間に売り切れとなるお店もありました。会場には小さな子どもさんからおじいさんおばあさんまで、あちらこちらに笑顔があふれていました。やはり地域の方はこの四年間、夏まつりを待ち望んでいたんだなあと実感した瞬間です。

地域住民の交流の場、賑わいの場を創出するという夏まつりの趣旨が、達成されたことと思います。四年ぶりの開催で、多くの役員は未経験の店番だったり、雷雨対応に追われたりと苦労もありましたが、やってよかったと思われたことでしょう。地域の皆さんとの一体感とふれあいが、夏まつりの醍醐味です。この夏まつりがさらに地域を盛り上げ、今後の地域交流につながるものとなるよう期待します。

にぎわうブース

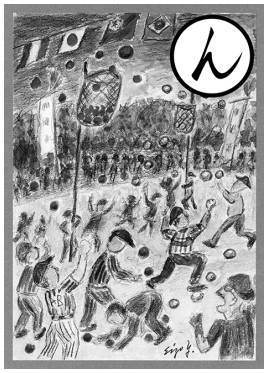
『里山辺かるた』よもやま話 ㊵

～里山辺地区に今も続く大運動会～

松本市地域文化財連絡協議会　副会長　小岩井　俊忠

十月早々に『大運動会開催』の通知が届きました。戦後の地域復興を願っていち早く復活しました。現在市内の多くの地区が、いろいろの課題を抱えて継続を断念する中、苦心しながらも今も脈々と続けています。

「多くの問題があることは理解しているが、地区住民全体が団結・協力し、求心力を高めるために、これほど多くの人が集まる機会が他につくれるだろうか？」と考えたとき、「一度止めたらもう戻らない」との思いが、苦労しながら続けている理由でしょうか。私は「朝早くから〈ゴザ〉と〈お重〉をかかえて小学校グランドへと急いだ」あの子供の日の運動会が懐かしいです。



運動会　気よりの良さの
十六町会

※「ん」の取り札を作るため「運」の字の「うん」を「ん」と読み替えてあります。

令和五年度戦没者・開拓物故者追悼平和祈念式典に寄せる「平和へのメッセージ」

題記の式典が八月二十三日に里山辺公民館で開催されました。会場では、山辺小学校、山辺中学校の児童・生徒が平和のメッセージを朗読しました。

『感謝』

山辺小学校六年　小畑　結生

最近お家の人から今も戦争をしている国があるんだよと話を聞きました。昔は日本も戦争をしていました。そこで僕は「平和とは何だろう」と考えました。今僕は、学校に行って勉強をして友達と遊んで家に帰っておいしいご飯を食べて、温かいベッドで寝ています。

しかし、戦争をしている国などは、僕たちが当たり前のように暮らしている普段の生活は、できません。僕たちは、毎日感謝をしなければなりません。

ですが、皆がいつでも感謝をしているわけではありません。友達とけんかをすると感謝のことは、忘れてしまいます。

なので僕は、嫌なことがあった人とか、泣いている人がいた時に優しく声をかけてあげたいです。皆が感謝をすることで、お互い嬉しくなって皆笑顔になる、そんな平和な国が増えてほしいです。

『平和』

山辺小学校六年　山本陽南子

私が生まれたこの国は、毎日おいしいご飯も食べられて、ふかふかの布団で眠れて、学校へも通える。そんな恵まれた環境が当たり前な私は、本当の平和の意味を理解していないのかもしれません。

ひとつ言えるのは、今この瞬間も戦争などで、私が過ごす当たり前の平和な生活を送れない人がいるということです。

では〝平和な世界〟になるために、そのために私に何ができるのかな。私にも何かできることはないのかな。私達が大人の時代に、世界中が平和であるために。

まずは、私の身近な人達を大切にしたいと思います。

〝何ができるのかな。〟と考えられる大人になりたいです。

『七十八年前の悲劇』

山辺中学校二年　福田　未菜

「戦争は絶対にしてはいけない。」これは私が今まで何度も耳にしてきた言葉です。私は松本市の代表として広島で過ごした三日間、このことを強く感じました。

みなさんは「やけど」という言葉を聞いてどんなことを想像しますか。熱いものにふれたときひりひりする感覚。私もこれを想像しました。しかし、原子爆弾による「やけど」は、原爆の熱で体液が一気に蒸発し、皮膚がはがれ、垂れ下がる。自分の腕や顔などの皮膚が垂れ下がっていく。この「やけど」を想像できますか。私はこの話を聞いたとき、改めて戦争の悲惨さを知りました。

この話は被爆体験伝承者のたちばなさんからお聞きして知りました。他にも三人の被爆者の方の話をお聞きしました。その三人の中には私と同じ当時十三歳の少女もいました。その少女は、建物疎開の作業中に被爆し、被爆後しばらくして亡くなりました。被爆前日の日記には「明日も作業を頑張りたい。」と書いてあったそうです。

たちばなさんは話の最後に「想像することが大事だ。」「まず〝自分〟を大切にすること。そして、他の人にとっての〝自分〟も大切にしてほしい。」と話していました。

二日目、三日目に訪れた江田島旧海浜学校の資料館、平和記念資料館には血まみれになった服、特攻隊員の遺書、原爆の熱で曲がった鉄骨、大量の放射線を浴び死の斑点が出た兵士の写真などたくさんの展示があり、七十八年前に起きたことの残酷さを物語っていました。

日本は世界で唯一の被爆国です。そしてこのたった一つの被爆国で生きる私たちは世界中のより多くの人にこのことを伝えていかなければなりません。

終戦からの七十八年間、日本では一度も戦争が起きていません。令和になった今でも戦争や紛争が絶えない国があります。核実験を行っている国もあります。七十八年前の悲劇を二度と繰り返さないよう一人でも多くの人に原爆、戦争で起きたことを伝え、これから先戦争で誰かが傷ついたり悲しんだりすることがなくなっていけばいいと思いました。

▣▣▣▣▣ 編集後記 ▣▣▣▣▣

記録的な猛暑から一変急な冷え込み、又、コロナ禍に加え今年は早い時期から、インフルエンザの感染が流行しています。

地域、福祉活動も再開していますが、体調管理に十分気をつけて参加して頂ければと願っています。

編集委員一同